

21. うなぎの王様 (ミンダナオ)

昔々、エリコという名の幼い少年が住んでいました。彼は漁師になりたいと切望していました。彼は一日中、毎日深く青い海に、彼の漁に使う槍を抱えてもぐり、魚を獲ろうとしました。ところが、エリコは水の中では、長く息が続かず、ちっとも魚を獲ることができなかったのです。

エリコの父はいつも彼の息子のことで怒っていました。そして、海で時間を浪費するかわりに、農場で父を助けるように言いました。ある日、彼は息子に最後通牒を出しました。「私を助けて、農場で働くか、もう私の息子をやめて、ここから永久に出てゆくかだ。」エリコは父を大変愛していましたが、父の要求には応えられませんでした。少年は、自分のなりたい仕事は漁師であって、農夫ではないことを知っていたのです。父は、最後通牒に従わない息子のことで大変怒って、彼らの農場からナタで追いたて、もう帰ってくるな、と告げました。

エリコは、彼は父を残して出てゆくことで、大変悲しくなりましたが、心の内では、他に選択の余地がないことを知っていました。いつの日にか、彼は自分のことをほこりに思わせ、農場に帰ろうと、決心しました。

漁に使う槍を手にとって、悲しむ少年は叔父の家に行くことにしました。そこでは、叔父が泊めてくれると思ったのです。しかし、父がすべての友人や親戚に、エリコを助けず、家に来たら、追い返せ、そして、息子を叱責するように、と警告していたのです。ですから、可愛そうな少年はどこにも泊まれないし、誰も助けてくれなかったのです。彼は完全にひとりぼっちでした。しかし、まだ、彼は漁師になる夢を追いかけて、決意していました。

夜が来て、疲れて空腹なエリコは、その地方の漁師たちが、海岸の近くの洞窟について、話してくれたのを思い出しました。彼らはしばしば、そこで夜を過ごして、その間に、魚を捕まえる罟を見ている、と言うのです。夜の星が彼の道を示してくれて、疲れきったエリコはついに漁師の洞窟の入り口に、たどりつきました。彼は、とりつかれたようにして、そう信じたのでした。

彼が洞窟に入ると、エリコは、光が洞窟の奥深い所から来ているのに気付きました。光に従って歩んで行くと、彼は洞窟の中に小さな部屋があることに気付きました。この部屋の中では、老人が座

って、燃える火の上で、大きなうなぎを網焼きしていました。

最初、彼は部屋に入ることを恐れていました。その老人が誰か知らなかったからです。しかし、振り返ることをしないで、その老人は言いました。「エリコ、恐れることはない。私のところへ来て、加わりなさい。お前が腹を減らしているのは知っている。」少年は、老人が自分の名前を知っているのに、驚きました。「私はこの地域の人、みんな知っているんだ。」と言って、老人は安心させ、「さあ、一緒に私の食事に加わりなさい。」と言いました。

焼いたうなぎがいいにおいをしていて、エリコの空腹が、恐れに優り、彼は用心深く部屋に入って、老人の所へ行きました。「お前が来るのは、わかってたよ。」と老人は、驚くエリコに言いました。「そして、お前は空腹に違いない。だから、このうなぎを用意したんだ。これは私が見つけた最大のうなぎだ。」そして、それは本当に大変大きなうなぎで、エリコが今までに見た、一番大きなうなぎでした。その少年は、老人が誰なのか、不思議に思いましたが、問うことを恐れていました。「もし、このうなぎを食べたら、」と言って、老人は続けました。「私は、お前が父親の誇りになり、お前の家族やお前の部族の英雄になることを約束するよ。」しかし、エリコは腹が減りすぎて、老人の言葉を理解できませんでした。そしておいしいうなぎをむさぼり食べ始めました。

エリコは大変空腹だったので、うなぎをすべて食べました。彼の胃袋がいっぱいになった時、彼は老人を見上げて、親切なもてなしに感謝を述べました。しかし、老人はどこにも見えませんでした。彼は静かに、跡形もなく、夜の霧の中に消えていきました。彼は洞窟を出て、海岸へ歩いて行きました。彼は水中眼鏡をつけて、槍を彼の手に取って、青い海にもぐり、魚を何匹か獲ろうとして、実際に捕まえました。彼がびっくりしたことには、簡単に、彼は巨大なうなぎを捕まえ、それは彼より大きかったです。彼には、自分の幸運が信じられませんでした。しかし、それは幸運ではなく、彼がもう一度やってみると、彼はまた大きなうなぎを捕まえられたのです。もう挑戦なんかすることもなく、彼は次々、獲ることができてうれしくなりました。失敗することなく、多くの大きな魚を、そして大きなうなぎを獲ることができたのです。

エリコは一日中、彼がもう運ばなくなるまで、肴とうなぎを捕まえて、漁を続けました。彼は捨てられた魚の網を見つけて、捕まえたものでそれを

フィリピンの神話と伝説

いっぱいにして、それを肩にかつぎ、彼の農場と、彼の家庭に向かいました。日が暮れかかっていたのでした。

エリコが彼の農場に帰った時、彼の父は彼を見て、大喜びしました。特に、エリコが運んできた、家族で1ヶ月十分食べられる、たくさんの魚やうなぎを見た時には格別でした。彼の父は息子のことをとても誇りに思いました。彼は農夫ではなく、漁師になれたのです。エリコは、あの不思議な老人が約束してくれたように、父親の誇りになれて、うれしかったのでした。

少年の手柄の知らせは、すぐにその土地中に広まりました。多くの人々が、そんな小さな少年が水中にもぐって、一日にそんなにたくさんの魚やうなぎを捕まえるのが信じられませんでした。そして、遠く、広い世界から来て、彼に挑戦しました。しかし、彼は常に魚獲りの挑戦をしに来た人を負かして、屈辱を与えました。彼はその土地の優勝した漁師でした。

エリコの漁の功績は、すぐに伝説的なものになり、彼はその土地の人びとに「ダトゥ・ベレグ」として知られ、それは「うなぎの王様」という意味でした。彼は、家族と、彼の部族の英雄になりました。